



Title	明清時代の時間意識 [全文の要約]
Author(s)	金, 博男
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15067号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85473
Type	doctoral thesis
File Information	Bonan_Jin_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 金 博 男

学位論文題名

明清時代の時間意識

本論文は、明清時代において、中国人の時間意識が如何なるものであったのか、また如何に変遷したのかを明らかにしようと試みた文学研究である。と同時に、明清時代の文学作品を題材とした文化史研究という一側面をも持つ。そのさいに、中国および西洋の時間制度が如何なるものであったのかに注目したのみならず、時間そのものが中国人によってどのように想像され、イメージが構築されていったのかにも焦点をあてた。

本論文の構成としては、序章では研究の背景と問題意識を提示し、第一章から第三章においては、明清時代に流行していた、猫の瞳の形態変化によって時刻を定めるという「猫時計」説や、呼吸による時計などの理想的時間論を取り上げ、中国人の時間にたいする独自のイメージを明らかにした。第四章と第五章では、清代の中期から形成されはじめた、中国人の新たな時間意識に注目し、日曜日休日制や「秒針」のイメージを中心に考察した。第六章と第七章では、試みに中国人の「未来」観や「未来」の時間論について考察した。終章では、序章において提示した、明清時代における中国人の時間意識研究の問題点を振り返り、本論の各章で論証して得られた新たな研究成果をあらためて整理して提示した。

各章の要旨をまとめれば、以下の通りである。

第一章では、猫の瞳の形態によって時刻を定めるという「猫時計」説を取り上げ、その活用状況を考察した。猫の瞳から精確な時刻を読み取ることは不可能ではあるが、その説自体は、通書などによって多くの人に知られ、清朝のあいだ、長きにわたって「猫時計」は「甚だしく当たる」と考えられていた。それは時間を知りたいという人々の要求に「猫時計」が一定の程度で応えていたからではないかと考えられる。つまり、猫の瞳を通じて、昼どきといった大体の時間さえわかれば、当時の人々はそれで事足りていたということである。そして、西洋時計が普及するにつれて、人々は次第に精確な時間を求めるようになっていった。そ

の要求に応えられない猫の目は、西洋時計を持たない人間と結びつき、ついには貧乏人の「時計」となった。民国期に入ると、西洋時計とともに科学知識もまた徐々に普及し、猫の瞳の変化の原理はより多くの人に知られるところとなり、「猫時計」はその姿を見せなくなっていくたのである。

第二章では、「猫時計」説における十二支の仕組みを考察し、「猫時計」説と術数の関係やその背後にある中国人の時間意識を論じた。その結果、「猫時計」説が、陰陽の変易や自然の摂理を反映する占術と、より近い関係を有するものであったことが確認された。「猫時計」説の「子午卯酉」「寅申巳亥」「辰戌丑未」という十二支を三つに分ける考え方は、術数「奇門遁甲」における「一气三元」のような、時間を三つに区切るという、おそらくは中国文化の処々に遍在するであろう、ある種の力学の影響下に成ったものではないかという可能性を提示した。

第三章では、中国人の「息」にまつわる理想的時間論の存在を確認し、それが如何なるものであったのかを考察した。まず、人間が一昼夜において一万三千五百回息をするという説は、現存する中国最古の医書である『靈枢』に記されているが、それが後に朱子が考える天地の運行を支持する理論のひとつへと発展していったことを指摘した。そして、「息」自体は、本義は鼻息と思われ、前漢時代からすでに「短い時間」と関係づけられ、一定の程度で時間の単位としても機能していたことがわかった。一万三千五百回息説は、日本へも伝わり、数多くの『日本書紀』の注釈書に提示されているが、そこで見られる、日本人は中国人よりも一日の呼吸数が少ないという新たな理論展開についても考察した。一条兼良『日本書紀纂疏』には、この説を利用して、逆に時刻を知り得ることが述べられているが、それを実践したと考えられるのが『西遊記』における孫悟空である。そして、一万三千五百回息説に続き、鼻の穴の左右それぞれに交代に息を通すことによって時辰を知るという鼻息による時間論にも注目した。この説がさらなる「進化」を遂げたものは、民国時期にも見られるが、中国人の伝統的呼吸論および呼吸にまつわる理想的時間は、西洋の科学知識および現代医学の到来によって崩れていったことを明らかにした。

第四章では、休息、娯楽そして犯罪事件という三つの観点から、清末の中国人における「日曜日」に関する時間意識の受容について考察した。まず、清末における一週七日制の名称に注目し、正式な名称であった「星期」が、早くも 1880 年代にすでに見られるようになったことを明らかにした。また「星期」が採用さ

れたのは、イデオロギー以外に、清末において和製漢語が大量に中国に伝わったこととも関係しているという可能性を指摘した。次に、日曜休日制の広がり、厳しい生活と伝統的徳からの圧力によって、1870年代には抵抗の動きがあったものの、時間がたつにつれて、休息の概念は徐々に中国人の間に普及していき、それまでの中国人の時間観念および生活スタイルへの自省として積極的に受け入れられるようになったということを論じた。そして、日曜休日制の広がりもまた、都市市民に土曜日の夜から始まる娯楽の時間をもたらしたことを示した。最後に、清末において、日曜日の時間を狙う犯罪事件が多く発生するようになったことを指摘し、日曜日が、休息と娯楽の時間であるのと同時に、犯罪の時間でもあったことを論じた。

第五章では、清末において「秒」がイメージさせる、より細かくなった「時間」に関する時間意識の形成について考察を試みた。まず、「秒」という単位の歴史を確認した。「秒」は、当初は長さの単位として使用されていたが、唐代頃より天文学における角度の計算に使われるようになり、明末にマテオ・リッチの時間改革によって、ついに時間の単位として使用されるに至った。そして、秒針を持つ三針時計の発明およびその中国への到来によって、「秒」はついに計測可能となったものの、三針時計は、最初は中国人にとってあくまでも飾り物やおもちゃにすぎなかったことが明らかとなった。つまり、当時の中国人は決してより正確な時間を求めていたわけではなく、「秒」という時間意識がそれによって育まれるということもなかったのである。次に、「秒針」のイメージの変容について考察した。「秒針」が意味する、ますます細かくなっていった時間そのものは、清末にいたってついに科学や文明の象徴となったことを示した。最後に、徐念慈の『新法螺先生譚』を取り上げ、清末の科学小説に見える「秒」さらに「時間」にたいする中国文人の新たな模索について考察を試みた。

第六章では、中国においてはじめて「未来」の世界を描写した小説、梁啓超『新中国未来記』の時間観念を考察した。まず、梁啓超と西暦の関係を追い、梁啓超は、一度は積極的に西暦を受け入れ、それを使いこなすに至るが、結局のところ、西暦が梁の個人的時間となることはなかったことを示した。また、『新中国未来記』においては、西洋の事柄に関する場合は西暦が用いられるが、物語世界の時間は、旧暦の干支紀年に基づいて書き進められていることが明らかとなった。

「壬寅」の年に書かれたこの小説において、「壬寅」こそがその時間観念の核心を担っており、梁啓超『新中国未来記』は、結局のところ、その構想からして干

支という円環的時間意識から逃れることができなかつたものと考えられる。

第七章では、中国人における「未来」の時間論として、詩妖という正史に記され続けた予言を考察した。魏晋南北朝時代以降、詩妖は、外延は拡大するも、史書に記される数はかえって激減し、衰退していった。その背景として、童謡の作り上げられる仕組みが明るみにされていったことと関係していることを示した。なお、後の明代には予言への懐疑的認識が一般的になりつつあるなか、予言を告げる「樟柳神」が流行していたが、それは、子供が予言を吐くという伝統あるいは文化意識のなごりとして、ある種の詩妖が実体化されたものではないかと考えられる。最後に、未来や終末をテーマとした近代の科学小説が、予言の形をもって警世の役割を果たすという点が、古くからの詩妖的「精神」を受け継いだものであることを示した。